

島地大等の本覚思想観

川 元 恵 史

はじめに

本論文では島地大等（一八七五—一九二七）の本覚思想観を考察する。島地大等は、いわゆる鎌倉仏教に共通する背景として「本覚思想」があることを初めて指摘した人物として知られる。本論文の趣旨は、島地大等と本覚思想との関係性を考察した上で、島地の思想構造の分析を試みるものである。別の角度からいえば、本論文は島地大等という人物を統括的に捉えるための有効な視座として、「本覚思想的発想」があることを論証しようとするものである。

一 「本覚思想」の定義

島地によれば、本覚思想とは「絶待思想の絶待的実現」を、始覚思想とは「その（絶待思想の——引用者注）相対的实现」を、それぞれ概念的に命名したものと定義される⁽¹⁾。

島地大等「日本仏教本覚思想の概説」は一九一九年の東京

帝国大学での講義録であるが、冒頭で「本覚思想」を検討する意義が説明される。その第一は「仏教々義の統一的研究に対する一方法」を提示するためである。仏教を体系的に捉える視点として、すでに教理に立脚した〈実相論／縁起論〉があるが、自身は仏教の他の一面である実践的立場から〈本覚門／始覚門〉を根本体系として、「仏教を統一的に綜観」することを試みるという。

第二は通仏教史的意義といい、そこでは独特の仏教史観が語られる。島地は始覚思想から本覚思想への発展形態として北伝仏教史を捉えている⁽²⁾。また島地には始覚思想・本覚思想に優劣をつける表現も見られ⁽³⁾、島地の北伝仏教観は、いわば〈低級なる始覚思想から、高級なる本覚思想へ〉という一種の発展史観に立っていると見ることができるといえる。

さて「本覚思想」の定義については現在も議論があるが、その原因について末木文美士氏は研究の「歴史的経緯」が関係すると分析する。島地大等は〈本覚思想／始覚思想〉の対

立・交渉によって、インド以来の仏教思想の変遷を説明しようとした。つまり「本覚思想」提唱者の島地の段階で、すでに「本覚思想」の語は広大な対象範囲を有しており、議論を混乱させた責任は島地にもある。末木氏は島地の成果を十分に評価しながらも、仏教思想を〈本覚思想／始覚思想〉⁽⁴⁾だけで語ろうとするのはさすがに無理があると評している。

このような末木氏の指摘は全く妥当であり、本覚思想の概念を考察する際に語義を広げすぎることは徒に論点を拡散させるだけであろう。ただし「島地大等の研究」となれば話は別である。この立場では島地がいう「本覚思想」を引き受けて、それについての考察を進めなければならない。

二 国家・社会観

島地の国家・社会観は「清浄国土の憧憬——親鸞聖人の国家観に就て——」に明かされている。親鸞にとつての（これは島地にとつても）理想世界は阿弥陀仏国土であり、一方この世界は無価値なもの、つまり「⁽⁵⁾そこごと、たはごと、まことあることなき」世界」としていったんは否定される。しかし信仰に入り、「顛倒の世界を顛倒の世界と認むる」⁽⁶⁾ことができたとき、世界の価値は一変する。一度は否定されたこの現実社会が肯定されることになるのである。

島地の論理に従うならば、「社会主義であつても共産主義

であつても、平和運動であつても軍備撤廃論であつても、乃至は僧参問題でも普選問題でも、更に他の一方の軍国主義であつても、国家主義であつても、労資協調であつても」⁽⁷⁾、すべては信仰に入つた者の自在な振る舞いの中で行われる限り肯定されるものとなる。つまり信仰のみが唯一の規範とされているのである。

この論は、島地がいう「教判としての本覚思想」とまったく同じ構造を持つ。島地は本覚門の教判的特色の第一を「頗る自由な見地から一切を肯定する思想」⁽⁸⁾と説明する。しかしただただ一切肯定なのかといえそうではない。

「この信仰に立たんとき」なる条件があるので、その条件の下に一切を肯定するのである。しかも、この一切肯定主義には、他面に余教無得道の思想、真宗に謂はゆる廢立の思想が、必ず裏付けられてゐるのである。〈中略〉⁽⁹⁾しからば、その互ひに相反する肯定と否定とを調和し、統一する原理は何なりやといふに、これ、即ち信仰に外ならぬ。

つまり信仰に立つ時に限って一切を肯定することが可能になり、島地がいう本覚門教判の特色と島地の社会への視座とが一致している様子が見て取れるのである。

島地のこのような口吻に接すると、信仰にさえ立てばよいのかという疑問が生じる。その他の規範・道德の存否についての問題である。これについては島地の「真俗二諦の要旨」を見る必要がある。前半部には「出世間法と世間法、両者は

両輪双翼相依相資の關係にある」など真俗二諦觀の典型的文句が並んでいるが、後半部では、道德は信仰からの自然的発露という島地の道德觀が確認できる。

吾等の道德生活は其の実他力全領の仏陀の大慈悲所謂宗教的信念が任運に等流露現し来る信後の報恩的生活に外ならず、蓋し阿弥陀仏の願力は転悪成善の徳あるが故に、信仰あるものは知らず識らず帝の則に順ひ自然に止悪作善の徳を全ふするを得しむ。⁽¹¹⁾

そしてこのような道德觀もまた、島地が指摘する本覚法門の特徴の中に、見ることができるのである。島地は仏教の觀行の変遷を概観し、三業のバランスが変化してきたことを指摘する。つまり身口意の三業のうち、本覚法門では身業の重要性が低下するという。そして道德は身業と関わりが大きいため、必然的にその地位は後退することになる。

道德の問題は、主として身業行である。〈中略〉他の六度、八正道等の諸行は、その名とともに忘れられて、觀中心となつた。本覚門に來りては觀に重きをおき、行即ち道德は、觀即ち信仰の自然的表現といふに一致した。謂はゆる、無作の報恩である。⁽¹²⁾

本覚門では具体的な道德は語られず、「信仰の自然的表現」という位置に留まる。これが島地自身の道德觀につながると考えられる。研究対象である本覚法門の特色として指摘した事柄が、そのまま島地の現実と重なっているのである。

島地大等の本覚思想觀（川 元）

三 仏教研究法

島地の提唱する仏教研究の方法にもまた、本覚思想的発想を窺うことができる。島地は「教義研究の標準思想（我六条学報の研究態度を明かにす）」において、「科学思想」、「哲学思想」、「教権主義」という三つの「教義研究の標準思想（＝根本的見地）」の可能性を示す。このうち「科学思想」と「哲学思想」とは、有用ではあるが根本的見地たりえない、と評価される。⁽¹³⁾

そして教権主義は、「客觀的教権主義」と「主觀的教権主義」の二つに分類されるが、島地は後者に則って研究を進めることを推奨する。まず前者の客觀的教権主義とは、「一字一句不可加減底の思想なり、極言せば文字の崇拜なり」と評され、その「偏執なる」態度から斥けられることになる。

一方の「主觀的教権主義」とは、經論に一言一句従うのではなく、經論の「精神」を体得した上で經論を研究すること、と定義される。⁽¹⁵⁾これだけではわかりにくいが、島地は具体的な説明を加えている。この「主觀的教権主義」とは、一宗の宗祖が立教開宗する際に必ず取られた手法だという。⁽¹⁶⁾「仏教の根本原理」を体得した上で經論に当たった結果が、祖師らによる經論の読み換えであると島地は解釈し、それを教義研究の基本的な方法論にすべきと述べるのである。

さてこのような考えもまた、先の「教判としての本覚思想」に表れている。島地は本覚門教判第二の特色を、「客観的な教権の妥当性から離れて、次第に主観的な信仰の妥当に重きおくにいたる」と説明する。⁽¹⁷⁾ここでは「客観的教権」と「主観的信仰」が対比され、後者が採用されるという構図になっている。

島地がいう仏教研究の方法と本覚門教判において、内容だけでなく用語でも一致があることは注目される。「教義研究の標準思想」は一九〇一年に書かれており、島地が本覚思想的発想をかなり早い段階から有していた可能性を示唆するものである。

ただしこれは、島地がただ主観的信仰を推奨し、典籍を軽視したということでは決していない。むしろ島地は当時の「註釈末書等は一切顧み」ない、「実験」偏重の風潮には否定的である。⁽¹⁸⁾主観的信仰に重きを置くといっても、基本的には文献を尊重する態度が求められている。

四 信仰のあり方

島地は仏教信仰を「始覚門の信仰」と「本覚門の信仰」の二種に大別する。「始覚門の信仰」とは理想に向かって修行を積み、その後「始めて覚る」という立場をとるもの、「本覚門の信仰」とは「本より覚る」、つまり「成仏」を目指す

のではなく久遠より「即仏・是仏」であるという立場をとるものである。⁽¹⁹⁾

島地は熱心な真宗者として知られるが、その真宗は「本覚門の信仰」に分類される。すでに触れたように島地には本覚思想と始覚思想との間に優劣をつけるような表現が見られる。しかしむしろ信仰においては始覚思想の重要性が強調されているといつてよい。なぜなら、どうあがいても現実には我々は凡夫だからである。島地は凡夫が安易に本覚法門を振りかざすことを諷めている。⁽²⁰⁾島地は本覚門の信仰であつても、始覚門から出発すべきだと主張する。

何としても釈尊の教は、因果修生即ち三世因果・無我・三宝・四諦と云ふやうな、根本の基礎となる所の信仰と云ふものを無視して居つては仏教にならぬ。そこから出発しなければ仏教にならぬ、恐しいことになる。⁽²¹⁾（中略）始覚に入らずして、本覚へはどうしても行けない。（中略）斯う云ふ考、それから私達はどうしたつて三世因果の教から出発する。

以上のように、島地は自らの信仰の問題についても（本覚思想／始覚思想）の型を持ち込んで論を構築していることが確認できる。自身の依つて立つ真宗信仰を「本覚門の信仰」と分類しながらも、始覚思想は否定されず、むしろ始覚思想から本覚思想へという径路を示すところにその特徴がある。

おわりに

本論文では、島地大等の国家・社会観、仏教研究法、信仰のあり方という三つの側面を検討し、それぞれの場面で〈本覚思想／始覚思想〉の枠組みに基づく考察がなされていることを明らかにした。島地が真宗の僧籍を有する仏教学者であったことを考えれば、検討する項目としてこの三つは適当であろう。島地は「本覚思想」の提唱者として学問的に評価されているが、島地にとつての「本覚思想」は単に研究対象という位置づけに止まらず、島地の思想的基軸であったのではないか。本論文はその可能性を提示する一試論である。

- 1 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」(島地大等『仏教大綱』(明治書院、一九三一年)所収)一〇頁。
- 2 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」五頁。
- 3 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」一三頁。
- 4 末本文美士『鎌倉仏教展開論』(トランスビュー、二〇〇八年)九六頁―九七頁。
- 5 島地大等「清浄国土の憧憬——親鸞聖人の国家観に就て——」(『真宗講話』三号、一九三二年、島地大等『思想と信仰』(明治書院、一九二八年)所収)三九〇頁。
- 6 島地大等「清浄国土の憧憬」三九八頁。
- 7 島地大等「清浄国土の憧憬」三九九頁。
- 8 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」八三頁。

島地大等の本覚思想観(川 元)

- 9 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」九二頁―九三頁。
- 10 島地大等「真俗二諦の要旨」(『静得庵編『真俗二諦観集』(ぐろりあそさえて、一九二七年)二八三頁。
- 11 島地大等「真俗二諦の要旨」二八三頁。
- 12 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」二二〇頁―二二二頁。
- 13 姫宮大等「教義研究の標準思想(我六条学報の研究態度を明かにす)」(『六条学報』六号、一九〇一年)一三頁。
- 14 姫宮大等「教義研究の標準思想」一一頁。
- 15 姫宮大等「教義研究の標準思想」一一頁―一二頁。
- 16 姫宮大等「教義研究の標準思想」一二頁。
- 17 島地大等「日本仏教本覚思想の概説」九四頁。
- 18 島地大等「信仰史上の問題——信仰に顕れたる形の上の問題——」(『布教』一卷六号、一九〇九年、島地大等『島地大等講話集』(百華苑、一九六五年)所収)一〇〇頁。
- 19 「覚」について、島地は「他力門では救と云ふこと、解する」と但し書きを添えている。島地大等「本覚門の信仰」(『和融誌』一四卷一〇号、一九一〇年、『思想と信仰』所収)五三三頁。
- 20 島地大等「法華経と華嚴経」(『新興』六卷七・八・一二号、一九二三年、『思想と信仰』所収)六三頁―六四頁。
- 21 島地大等「法華経と華嚴経」六四頁―六五頁。

〈キーワード〉 島地大等、本覚思想

(龍谷大学大学院研究生)